

最高傑作『侍』が問うこと

遠藤周作の代表作が『沈黙』か『侍』かについては、おそらく意見が分かれるだろう。

『沈黙』のクライマックス・シーンで^{キリスト}基督は「踏むがいい」と言うが、『侍』では従者が主人公に向かって「ここからは……あの方がお供なされます」と言う。踏んでもいいと声を出す基督はドラマとしても劇的で解りやすいが、書き手の感情の昂ぶりも想像できる。そこへ行くと『侍』における基督は姿も見せず声も発せず、前述の従者の台詞の先に見事に隠されている。小説家の熟練、抑制の技を見る思いだ。

『侍』は、『沈黙』が書かれてから十四年後、作者がもっとも精力的に仕事をこなした五十代の半ばの作品である。知られるように遠藤周作は病弱な生涯を送ったが、『沈黙』以後『侍』を書くまでの十年余りは、もっとも長く健康でいられた時期だった。作品を準備し執筆し推敲する、そのための体力・気力がもっとも盛んだった時の作品なのである。



創作ノート「小説プラン(昭和55年)」

前半には『狐狸庵日乗 巻の四』、後半には『侍』の構想断片、『女の一生』『鉄の首枷—小西行長伝』などの創作メモが書かれている。
(長崎市遠藤周作文学館蔵)

『侍』草稿

「第六章」と書かれているが、刊行された本文では第七章に当たる侍の受洗の場面。比較すると他にも差異が見られる箇所があり、納得がいくまで推敲した過程を窺い知ることができる。
(長崎市遠藤周作文学館蔵)

加藤宗哉

それでも作者は、小説は自分一人で書くのではなく何かの、誰かの力を得て書く——という。この言葉を思いだすとき、『侍』の主人公のモデルとなった支倉常長が慶長遣欧使節としてヨーロッパへ渡ったのは地震による三陸大津波の二年後だったことに気づく。使節渡欧は、海外貿易の実現によって財政を豊かにしようとした藩主・伊達政宗の復旧政策の一つでもあった。

その日から四百年が経ったいま、我々はもう一つの復旧——魂の復旧というテーマを、東日本大震災を体験した今、『侍』という不朽のドラマに見つけるはずである。

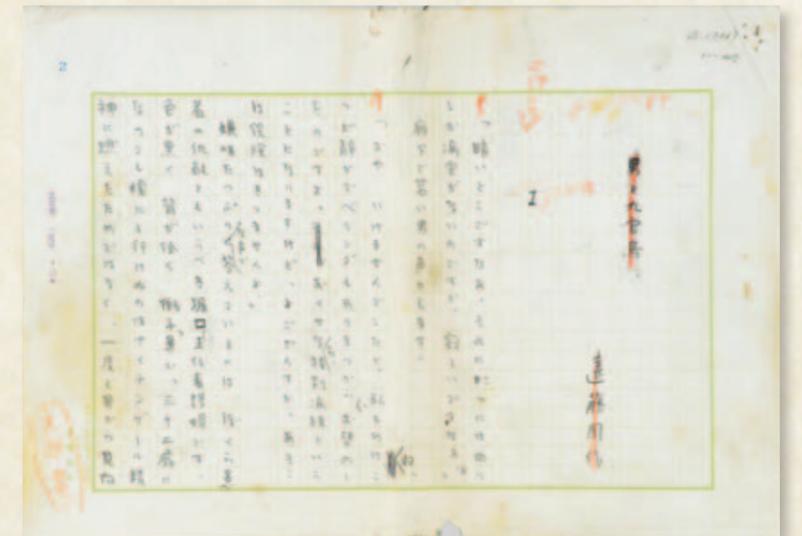
加藤 宗哉(かとう むねや)

作家。慶應義塾在学中、遠藤が編集をしていた「三田文学」に参加。以後30年にわたり師弟関係が続いた。1997年より2013年まで「三田文学」編集長。主著に、『モーツァルトの妻』(PHP文庫、1998年)、『遠藤周作』(慶應義塾大学出版会、2006年)がある。



愛犬のクロと 1927年

クロは、大連にいた頃飼っていた満州犬。幼少期、誰にも言えない悩みや哀しみを打ち明ける話し相手だった。
(長崎市遠藤周作文学館蔵)



『男と九官鳥』原稿

肺結核で入院した際、不安な胸の内を吐露する相手であり、手術中に身代わりのように死んでしまった九官鳥をモデルにした小説作品。400字詰め原稿用紙全44枚。初出は「文学界」1963年1月号。『新日本文学全集』第9巻(集英社、1964年3月)に収録後、『哀歌』(講談社、1965年10月)、『遠藤周作文学全集』第7巻(新潮社、1999年11月)等に所収。



『侍』 新潮社 1980年4月

新潮社の「純文学書下ろし特別作品」シリーズとして発表された。
(当館蔵)



「同伴者」—遠藤周作のイエス像

1960年、三十七歳の遠藤周作は肺結核の再発で入院をし、以後三度の手術など二年余の入院生活を強いられる。今回自筆原稿が展示される『男と九官鳥』をはじめ『四十歳の男』『葡萄』など入院生活を綴った短編は数多い。『白い人』で芥川賞を、また『海と毒薬』でも数々の賞を受賞し、円熟期を迎えようとした作家にとってこの入院生活が如何に過酷なものであったことかは想像に難くない。しかし、この入院生活で、自らの死と向き合いながらもそこで見聞きしたものが、後の遠藤のイエス像を形成していくことになる。

病人が本当に辛いのは、自分ひとりが苦しまなければならないという孤独感、この苦しみを誰にも分かってもらえないという絶望感にあると、遠藤はいう。遠藤の描くイエスは奇跡を起こして病人の命を救うことはない。ただ傍に寄り添うだけである。

のちに遠藤は、『死海のほとり』で熱病に苦しむアルパヨという男を訪ねるイエスを描いた。誰一人として傍に近寄らなかったアルパヨに「そばにいる。あなたは一人ではない」とイエスが語りかける。そして「あの人が彼の手を握ってくれると、苦しみはふしぎに少しずつ減っていくような気がした。」と作者は記した。遠藤は入院中、窓辺から見た白血病の夫と若い妻が、彼らにできるたった一つの行為であるかのよう

今井真理

に手を握る様子を見て、苦しみを分かち合う、「同伴者」の姿を心に刻んだといえる。

幼い頃、遠藤は両親の不和のため、孤独な生活の中でたった一人の話し相手だった犬にだけ悲しみを打ち明けた。入院中は死の恐怖や悲しみを病室で飼っていた九官鳥に聴いてもらった。多くの作品に描かれる犬の眼も、鳥の眼もまた、イエス像に繋がるモチーフのひとつである。退院後、遠藤が狐狸庵山人として、人の心の温かさやユーモアにあふれた作品を次々発表したことから、この病床生活が遠藤の作家としてのひとつの分岐点になったことはいままでもない。

3・11の大震災。誰もが深い悲しみにおそわれ、無力感を嘆いた。遠藤が訪れた『侍』の舞台である月の浦も当時の面影はない。今一度、苦しんだ人、ひとりひとりのそばにいる「同伴者イエス」の存在を、私たちは信じていることができるだろうか。イエスは何も言わず、傷ついた人の手を握り、ただ涙を浮かべるだけかもしれないが。

今井 真理(いまい まり)

文芸評論家。聖心女子大学在学中、遠藤の知遇を得る。以来、親交を深めた。共著に『遠藤周作の研究』(実業之日本社、1979年)がある。「悪の行われた場所『海と毒薬』の光と驕」(「三田文学」2006年秋季号)など、悪の問題を主軸として遠藤論を展開している。